

移住者の歴史経験と兄弟の生活戦術

—琉球・沖縄における寄留民の歴史人類学的研究—

玉城 毅

本研究の目的は、既存の制度的秩序からはじき出された琉球・沖縄の居住人・寄留民（※近世においては居住人、近代では寄留民と呼ばれた）の歴史経験に着目し、彼らをはじき出した秩序と、制度の外で彼らがつくり出した秩序を明らかにすることである。

寄留民とは、故地を離れて別の場所に移住して定着した人々と、その子孫を指す。彼（女）らは、最初の移住から数世代を経てもよそ者とみなされ続け、制度的・社会経済的な秩序の外に位置づけられてきた。とはいっても、彼（女）らは、秩序からはじき出されただけの受け身の存在ではなく、居住人・寄留民同士が集まって、自分たちの村落（屋取）を形成したケースも多い。

一般的に屋取は、近世首里王府に仕官できなかった下層士が、農村に移住して形成した集落とみなされている。しかし、筆者は、士族層だけでなく、百姓層によっても屋取が形成されたことや、奄美から台湾まで広範囲に移住・定着した糸満漁民も、移住先で「寄留民」と呼ばれ、彼らが形成した分村も屋取と呼ばれた例があることを、現地調査と史料調査によって知った。

これらの人々に共通しているのは、名称だけでなく、近世琉球の国家体制との関わりで生み出されたこと、政治体制が転換した近代以降も存続したこと、彼らの集落形成過程で兄弟が重要な役割を果たしことである。したがって、寄留民の歴史を捉えるためには、長期的な政治経済史研究の視点が必要であり、また、兄弟の実践的な関係を捉えるために、親族研究の視点が必要である。つまり、政治経済史研究と親族研究の交差するところに、本研究が位置づけられることになる。

本研究は、主題・対象・方法を提示した序章に続いて、第1章から第11章までの4部構成とし、結論として終章をおいている。序論に当たる第Ⅰ部（第1章—第3章）では、寄留民研究の研究史的な位置づけの作業を行ない、寄留民の歴史経験を捉える視点を提示した。これに基づいて第Ⅱ部から第Ⅳ部まで、歴史叙述と民族誌的記述によって構成している。第Ⅱ部（第4章—第6章）では、寄留民を生み出した背景として、近世琉球王国の体制的な秩序と、その中を生きた人の経験にアプローチした。第Ⅲ部（第7章・8章）では、近世的な秩序が改変された近代移行期の階層状況を捉え、寄留民に与えた近代のインパクトを捉えた。第Ⅳ部（第9章—第11章）では、フィールドワークに基づいて近現代の寄留民の生活実践をミクロなレ

ベルで捉えて描き出した。終章では、序章で述べた問題意識に戻り、各部各章で明らかになった点を総合的に考察して、居住人・寄留民が生きてきた歴史経験の特徴を指摘した。

本研究が明らかにしたことの要点は次のとおりである。(1)近世琉球の体制的秩序は、国家・階層・親族が絡み合う歴史過程のなかでつくられた。(2)そこでは、上層士を再生産する親族規範として〈父系出自〉と〈家〉が機能したのに対して、中下層士の間ではそれほど機能しなかった。そのような状況において、中下層士は不安定の地位におかれ、彼らの中から農村部に移住して居住人になる人々が現われた。(3)近世の農村は、土地を共同利用する地割制度が敷かれており、理念的に言えば、それは村人を平等な地位におくものであった。しかし、実際は、開拓によって財産を築く人々が現れ、農村も階層分化した。農村の上位階層を成したのは、首里・那覇の上層士と主従関係にあった地方役人層であった。彼らは、上層士の文化を模倣し、私的な系図を作成したり、家産を築いて〈家〉を形成した。(4)その一方、〈父系出自〉と〈家〉は、一般の百姓、中下層士、寄留民の生活を支えるものではなく、とくに、制度的な秩序の外にはじき出された寄留民の間では、〈二者関係としての兄弟〉の実践的な協力による生活戦術が展開された。そしてそれは、屋取の形成につながっていった。(5)琉球王国が解体した近代移行期において、明治政府は、琉球の旧慣を存置したために、近世の階層構造が再生産され、寄留民もまた拡大再生産された。(6)〈二者関係としての兄弟〉は、近代以降も機能し、屋取の経済的な展開の主要な要因になった。(7)兄弟の実践的な関係の延長線上で、「兄弟集団」が形成されることもあったが、多くの場合、それは「門中（父系出自集団）」として再表象された。以上によって導出される結論を簡潔に示すと、〈父系出自〉と〈家〉の規範によってつくられた秩序の中で居住人・寄留民は生み出され、〈二者関係としての兄弟〉の協力によって独自の秩序を形成したということになる。

本研究が明らかにしたのは、国家を基点とする権力の作用を受けながら、自分たちの生活実践を積み重ねてきた人びとの歴史であった。寄留民の歴史経験は、政治経済史研究と親族研究、及び、人類学と歴史学を接合することによってアプローチすることができた。学際的研究によって寄留民の歴史を捉えたが、逆に、寄留民研究によって、複数の研究領域を総括することができた。本研究が試みたのは、そのような全体論的な歴史人類学的研究である。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	玉 城 毅
論文審査担当者	(主査) 教授 沼崎一郎 教授 木村敏明 准教授 川口幸大
論 文 名	移住者の歴史経験と兄弟の生活戦術 —琉球・沖縄における寄留民の歴史人類学的研究—
<p>本論文は、長年にわたるフィールドワークと史料分析に基づき、「寄留民」に着目し、彼らが創り出した地域社会秩序の様相を歴史的かつ民族誌的に解明したものである。</p> <p>本論文は、序章、4部11章からなる本論、および終章によって構成され、補論と付録4点が付加されている。序章では、本論文の課題が2つ設定される。1つは居留民を生み出した歴史構造の解明であり、もう1つは「階層文化としての親族」の解明である。</p> <p>本論第Ⅰ部は3章から成る。第1章では沖縄研究の歴史が回顧され、寄留民研究の欠落が指摘される。第2章では東アジア人類学における親族研究が回顧され、沖縄理解には兄弟の果たす役割の解明が不可欠であることが指摘される。第3章では、近世琉球および近代沖縄における社会の階層性と、階層による親族文化の相違が指摘され、寄留民を理解するには父兄出自、家、兄弟という3つの視点を総合する必要性が示される。本論第Ⅱ部も3章から成り、第4章では近世琉球王国の地頭制の下で父兄出自と家が士族階層を支える文化的価値となったこと、第5章では琉球王府の役職の不安定さが士族の寄留民化を促したこと、第6章ではそうした状況下で兄弟の連帯と協力が見られることが明らかにされる。第Ⅲ部は2章から成り、第7章では琉球処分後の沖縄で旧来の社会階層が維持されつつも変容したこと、第8章ではその結果無禄となった士族が寄留民化しつつ兄弟の連帯と協力を通して多様な適応を遂げたことが明らかにされる。第Ⅳ部は3章から成り、第9・10章では沖縄県南部の寄留民集落における兄弟のつながりと地域社会の形成が、第11章では糸満漁民集落における兄弟関係の実態が民族誌的に描かれる。</p> <p>そして、終章では、日中両属体制下の琉球・日本統治下の沖縄の政治経済体制が構造的に寄留民を生みだし続けたこと、そして兄弟を中心とした実践的親族という階層に特有の親族文化が歴史的に形成されたことが結論づけられる。</p> <p>琉球・沖縄における寄留民の実態を歴史的かつ民族誌的に明らかにする研究は斬新であり、沖縄研究の間隙を埋めるものである。また、兄弟の果たす役割を解明した本研究は、人類学における親族理論の発展に寄与するところ大なるものがある。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	